

# 汚染源から道徳的影響力へ

—— ディケンズ『ドンビー父子』の乳母 ——

中 田 元 子

## 1. 乳母登場

『ドンビー父子』(1848)はヴィクトリア朝の乳母<sup>ウェットナース</sup>使用のマニュアルともいえる側面をもっている。乳母の選定方法、雇用条件などの記述が当時の育児書や医学書の内容を反映しているばかりでなく、乳母についてミドルクラスが抱いていた偏見も描き出されている。<sup>1</sup>乳母に関する社会史の史料の側面を持ちながら、しかし、『ドンビー父子』の乳母に関する記述には、奇妙なことにひとつの重要な論点が欠けている。すなわち、そこには乳母使用の非道徳的側面への言及がまったくないのである。乳母として働けるということは、言うまでもなく乳汁が出るということであり、その乳を与えるべき自分自身の子がいるということである。つまり乳母は、本来なら自分の子に与えるべき乳を、金のために上の階級の子どもに与えていることになる。母と乳を奪われた乳母の子は他人の手で人工哺育されることになるが、そもそも人工哺育の死亡率が高いために乳母の需要がある時代にあつては、乳母の子は命を落とす危険にさえさらされることになった。これは雇う側からいうと、自分の子のために乳母の子の命を犠牲にするということであつて、程度の違いはあつても雇用者側に良心の咎めを感じさせずにはおかない事態だっただろう。たとえば、四度首相を務めたグラッドストーンは、1842年、第二子に乳母を継続的に雇わざるをえない状況に直面したとき、乳母の代わりにロバの乳で育てることにする。医師から乳母の子の死亡率の高さを聞かされていたからである (239, 247)。<sup>2</sup>

医師たちは、美容上の理由から、また社交を優先させるために授乳を拒む母親たちを批判していた。また、『ドンビー父子』の出版直後ごろから、乳母雇用の非道徳的側面が医学雑誌を中心に問題にされ始め、1860年ぐらいにこの論争は最盛期を迎える。<sup>3</sup>社会悪に敏感なディケンズが、乳母を登場させるにあつてこのような事態に気づかないはずがない。ディケンズはいろいろな社会問題について積極的に発言するとともに、小説でもそれらの問題をとりあげたので、この『ドンビー父子』という同時代作品が、乳母問題という道徳的社會

問題の論争の火ぶたを切る可能性も十分にあったはずである。ところがこの作品はその問題にはまったくふれていない。ディケンズが下層階級の子どもの置かれた窮状に関心を抱いていたことが明らかだけに、『ドンビー父子』での沈黙は注意を引く。<sup>4</sup>

またディケンズは、ドンビーの息子が誕生直後に生母を失うという状況を作ることによって、ドンビーの乳母使用に正当な理由を与え、乳母雇用が引き起こす道徳的問題を避けているようにさえ見える。十分安全な人工栄養のない時代にあつて、生母が出産直後に亡くなった場合、金銭的余裕のある人々が真っ先に考えるのは、できるだけ早く適当な乳母を探すことであつて、これは乳母雇用を批判する人たちも黙認せざるをえないと考えた事情だったからである。さらにディケンズは、生母をミドルクラスに奪われた下層階級の生後6週の乳児に、生母の妹を信頼のおける専属の乳母として与えることによって、上の階級が自分の子どもたちを生き延びさせるために、下の階級の子どもの命を犠牲にしているという非難が生じないように配慮しているように見える。

授乳するミドルクラスの母親を理想像としてくり返し描いたディケンズだけに、その作品に乳母が登場するのは例外的ともいえる。<sup>5</sup>さらにこの乳母は、ドンビーの跡継ぎを養育するばかりでなく、男の子でないというだけの理由で父親から価値のないものとしてしか扱われないドンビーの娘フロレンスに優しく接し、精神的よりどころになる。この乳母は、ある失敗のためにドンビーの逆鱗にふれ、たった6ヶ月で養育係をくびになってしまうが、6年後、養い子ポールの臨終の場に母親代理として呼ばれる。さらには物語の最後で、再婚した妻に去られ、事業にも失敗した傷心のドンビーを見守る役目も果たす。このように、『ドンビー父子』では乳母がヴィクトリア朝の理想の母親の代理ともいえるような肯定的人物として描かれている。乳母雇用が生み出す道徳的問題の側面に目をつむり、乳母が母親の理想像でもあるかのように描いたのはなぜだろうか。本論では19世紀中頃の乳母に関する言説を参照しながら、ディケンズの乳母表象を分析する。

## 2. 汚染源としての乳母

『ドンビー父子』が月刊分冊で出版され始めた1846年、医学雑誌『ランセット』誌上では、十年後の乳母論争とは違う趣旨で、乳母が問題になっていた。それは梅毒の感染源、あるいは感染経路としてである。19世紀半ばまで、母乳を通じた梅毒の感染はないという定説が流布していたが、実際に治療にあたっ

ている医師たちからの報告によって、その説に疑問が投げかけられ始めたのである。たとえば、梅毒の表面上の兆候は消えたので乳母自身は治ったと思っ  
ても、授乳した養い子が乳母から梅毒をうつされ、その子が今度は実母に感  
染させたと考えられる例や、逆に、先天性梅毒の赤ん坊に授乳することによ  
って病気をうつされた乳母が、乳母自身に自覚症状がないため罹患したとは気づ  
かずに別の赤ん坊に授乳してうつしてしまうなど、乳母によって梅毒が広めら  
れる場合があると主張された。<sup>6</sup>

「ドンビー父子」でも、乳母による梅毒感染の可能性は、乳母候補ポリー・  
トゥードルの検査の場面における、ポリーの長男の顔の赤い傷痕への注目によ  
って示されている。乳母候補を探し出してきたトックス嬢が、乳母選択を任  
されているドンビーの姉にその一家を紹介する。

“The fine little boy with the blister on his nose is the eldest. The  
blister, I believe,” said Miss Tox, looking round upon the family, “is  
not constitutional, but accidental?”

The apple-faced man was understood the growl, “Flat iron.” (66)  
長男の鼻の傷痕が、梅毒性痘瘡ではなく、アイロンに触れて火傷したことによ  
るものであることを確認しているのである。

乳母の検査に自らは立ち会わないドンビーは、これほど特定化された感染源  
としての乳母観はもっていないが、漠然とした汚染源としての乳母への懸念は  
抱いている。ドンビーは自分の家と会社の跡継ぎの生存が、一刻も早い乳母の  
選定にかかっているというときに、乳母の候補を次々に却下するが、それは乳  
母候補がおしなべて適正に欠けるからというよりも、そもそもドンビー家の人  
間ではない乳母によって授乳されることによって、ドンビー家の赤ん坊に他人  
の血が注入され、ドンビー家の血が汚染されることを嫌悪したからである。19  
世紀後半になってもなお、医者を含めて、母乳によって心的、道徳的性質が伝  
わると考える人もいたことを考えれば、他人の乳＝血の流入に対する嫌悪感自  
体はドンビーの誇大妄想的反応とばかりはいえない。<sup>7</sup>

ドンビーはまた、乳を介して自分の子どもと乳母の子どもの間に関係ができ  
ることも心配している。乳母として適格であることを示すために自分の部屋に  
連れてこられたポリーの子どもたちを見て、“These children look healthy, ...  
But my god, to think of their some day claiming a sort of relationship to  
Paul!” (67) と懸念を表す。<sup>8</sup>さらには、乳母の赤ん坊も男の子であることに  
気づくと、自分の跡取り息子と取り替えられるのではないかという、企業の経

営者にはふさわしくないような妄想にとられる。

最終的には、息子の生存のためには一刻の猶予もなくなつたことを悟り、覚悟を決めてポリーを雇うのだが、そのさい様々な条件をつけて、できるだけポリーを下層階級の家庭から遠ざけようとする。住み込みで乳母として働いている間は家族に会うことは禁止させ、さらに家族との関係を断ち切らせることの象徴として、トゥードルというポリーの姓を、その場で思いついた名前に変えさせる。また、この関係があくまでもビジネスの関係であることを強調し、養い子に愛着を感じないように、乳母として必要がなくなり次第、乳を与えた子のことは忘れるようにと、極力人間的感情を排除しようとする。

“It is not at all in this bargain that you need become attached to my child, or that my child need become attached to you. I don't expect or desire anything of the kind. Quite the reverse. When you go away from here, you will have concluded what is a mere matter of bargain and sale, hiring and letting; and will stay away. The child will cease to remember you; and you will cease, if you please, to remember the child.” (68)

後継ぎの生存を下層階級に頼ることに嫌悪感を覚えるが、それをあくまで経済的取り引きと考えて耐えようとする。したがって、ポリーから、別の名前と呼ばれることについて、その条件を給料に反映させてもらいたいと要求されると、それこそ望むところとすぐに承諾する。このようにドンビーは、乳母を使い捨ての物のように扱い、この関係を経済取り引きとみなすことによって、わが子の生存を下層階級に頼ることの不安、嫌悪感を抑えようとする。

『ドンビー父子』にはミドルクラスが持っていた汚染源としての乳母という考え方が描かれてはいるが、それはドンビー特有の嫌悪感であるとされている。自己を頼むところが強く、他人の助けを受けることを潔しとしないプライドの高いドンビーならではの嫌悪感として、自分と会社の跡継ぎの生存を、とにかくドンビー家以外の人間に頼ることを苦々しく思うドンビーの嫌悪感として描かれているのである。かくして、乳母への嫌悪感はひとりドンビーだけがもつ現実的な根柢のない妄想的なものとして片付けられ、その証にドンビーの息子ポールは、下層階級の乳＝血による汚染の悪影響を見せることなく順調に育っていく。

Little Paul, suffering no contamination from the blood of the Toodies, grew stouter and stronger every day. (100)

### 3. 理想の母親としての乳母

『ドンビー父子』において、乳母ポーリーは、汚染源であるどころか、よき母親代理として描かれている。彼女はその乳でポールを育てるだけでなく、男の子でないというだけで価値のないものとして扱われ、母親を亡くした後も父親から声もかけてもらえず寂しい思いをしているフロレンスの話し相手になり、精神的よりどころになる。

子どもを養い育て、適切な教育を施すのは、ヴィクトリア朝の母親に課せられた最重要の仕事であった。国家安定の基盤として、女性の道徳的影響力に満ちた家庭の重要性を唱えたエリス夫人は、子どもの教育についても母親が影響力をふるって精神の陶冶をはかるべきであると考え、母親こそ「子どもへの影響がもっとも大きい人物であり……その手に子どもたちの精神的・道徳的幸福は握られているのである」と述べた (*The Mothers of England: Their Influence and Responsibility*, 42; qtd. in McKnight 4)。

ポーリーがドンビー家の子どもたちにとって実の母親にひとしい存在であることは、ポールが死の間に彼女に会いたがったことに象徴的に示されている。死の床で、母親のようにかわいがってくれた人はいるかと問うポールに、姉フロレンスはポーリーがいたと告げる。フロレンスから、自分にも母親のようにやさしいまなざしを注いでくれた乳母がいたことを聞いて、ポールはポーリーを死の間にベッド脇に呼び寄せる。ポールは母親の愛に包まれたことがあるという満足感をもって死んでいくのである。エリス夫人は、『英国の女性たち』で、女性の自己犠牲をいとわぬ態度を称揚し、とくに病人にやさしく仕えるときにその尊い精神が発揮されると述べる (31)。ポーリーは自分の家族を家に残してポールの死の床にかけつけ、ポールに満ち足りた思いをさせるので、その段階でできる最高のケアをしたといえるだろう。

物語の最後で、ポーリーは再びドンビー家の敷居をまたぐことになる。今度は家政婦として。再婚した妻に逃げられ、信頼していた支配人にも裏切られて、働く意欲を失ったドンビーは破産に追い込まれる。使用人も去り、家財道具もなくなったがらんだ家の中で、精神的崩壊の際にあるドンビーを見守る役割を果たすためにポーリーはやってくる。ポーリーを送ってきた夫のトゥードルによれば、以前ポーリーがドンビー家の乳母として働いたときとは違って、今では自分だけの稼ぎで一家を成り立たせることができるらしい。したがって、今回のポーリーの家政婦としての務めには慈善活動的色合いがある。ミドルクラスの女性に認められていた唯一の対外的活動は、貧者を訪問して励ますなどの慈善

活動であったことを思い出せば、報酬を第一の目的としないポリーの家政婦としての住み込み仕事は、困窮者を助けるミドルクラス女性の慈善活動と通じるものがある。

ドンビーはポリーとの面接時、雇用関係が終わった後は一切関係はないものとする、養い子は乳母のことなど覚えてはおらぬので、ポリーのほうも養い子のことはできれば忘れるよう言い渡していたが、他ならぬドンビーの子どもたちはポリーのことを覚えており、そればかりかポリーを母親代理として位置づける。さらに、関係断絶を言明したドンビー自身も、昔の主人の窮状を知ってやってきたポリーの世話を受けることになる。かくしてポリーは単なる使用人ではなく、自己犠牲をいとわぬミドルクラス女性の理想像に合致する存在となる。

しかし、ひるがえって、ポリー自身の家庭にとってポリーがどのような存在であるかを考えると、ミドルクラスの規範におしこめられたポリーの問題点が見えてくる。ポールとフロレンスにとっては一時期理想の母親のような存在であったポリーは、彼女自身の家庭にとっては全くその役割は果していない。ドンビー家に住み込んでいるため、自分の赤ん坊は妹の人工哺育に任せざるをえない。信頼できる血縁者とはいっても、当時の人工乳によって育てられた乳児の死亡率の高さを考えれば、そのために命を落とすこともありうると覚悟のうえであろう。ポールに乳を奪われた子は、母親不在にもかかわらず運良く生きのびることができたようだが、トゥードル家ではその後生まれた子どものうち一人が亡くなっている。これはポリーがまた乳母として働きに出たためかもしれない。また、他家に出たきりでは家庭の中で子どもに道徳的影響を与えようがない。ポリーの長男が悪い仲間に入って墮落することは、母親不在が影響を与えていることをにおわせる。

#### 4. ディケンズ家の乳母

乳母雇用がはらむ非道徳的側面にはふれず、乳母を人間的に尊敬できる人物として、ミドルクラスの模範ともなりうる人物として提示した背後には、ディケンズ自身の家庭事情にからむ罪悪感があると考えられる。

ディケンズは妻キャサリンとのあいだに十人の子どもをもうけた。夫が授乳する母親を理想としていても、その妻が実際にうまく授乳できるとは限らない。そしてキャサリンの場合、夫の理想像に合致しなかった可能性が高い。第一子（1837年1月6日誕生）の出産直後、ディケンズの手紙にはキャサリンの具合

がよくないことが記されているが (*Letters* 1: 223, 227), 同居していたキャサリンの妹メアリー・ホガースがいとこに出した手紙 (1837年1月26日付) には、より具体的に、キャサリンが具合が悪いため授乳ができず他人に任せざるをえなくなったこと、またキャサリンが授乳できないために将来子どもに愛されないのではないかと悩んでいることが報告されている (“*New Letters*” 77-78)。また、第五子 (1844年1月15日誕生) の場合には、子どもが生まれる前からすでに母乳育をしないことが想定されている。というのも、ディケンズはキャサリンが出産したらすぐ赤ん坊はキャサリンの母親に託して、数ヶ月間大陸に住むことを計画しているからである (*Forster* 308)。このころにはもうキャサリンが授乳できない、あるいはしないことが暗黙の了解になっていたのかもしれない。ディケンズは第五子が生まれた二日後、友人たちからの食事の誘いに対する返事に、“*Nurses, wet and dry; apothecaries; mothers-in-law; babies; with all the sweet (and chaste) delights of private life; these, my countrymen, are hard to leave.*” (*Letters* 4: 21)と書いているが、これはチック夫人によって語られる、ドンビー家に赤ん坊を連れた乳母候補が多数集結した場面 (62) を即座に思い出させる。ディケンズの十人の子どものうち、生後八ヶ月で突然死した第九子以外はみな成人したこと、またキャサリンがしばしばマタニティ・ブルーに陥っていたことを考えると、第一子、第五子以外にも乳母が雇われた可能性が高い。

ディケンズは授乳する母親を理想としてはいたが、実際には自分の家では乳母を雇わざるとえない状況だった。したがって、乳母使用の非道徳的側面に気づいていたとしても、乳母雇用の慣習を非難することはできなかった。『ドンビー父子』で乳母を美化したのは、乳母雇用の問題点は承知していながら、自らの乳母雇用の経験のために批判ができないというジレンマを解消するためだったのではないだろうか。乳母を道徳的影響力を具えた存在に持ち上げることによって、乳母のイメージの向上をはかる。それが自分にできるせめてもの乳母問題への貢献だと考えたのかもしれない。

しかし、たとえこれによってディケンズがある程度ジレンマを解消し、良心の咎めを癒すことができたとしても、それは一時的なものにすぎないだろう。ひとたびポリーの家庭に目を向ければ、そこに生じている不協和音を無視するわけにはいかないからである。道徳的影響力はミドルクラスの範囲を超えては及ばないこと、さらには乳母の美化はミドルクラスの自己満足に過ぎないことがあらわになる。『ドンビー父子』以降、ディケンズはその作品に乳母を登場

させることはなく、1860年前後の乳母論争にも加わらなかった。このときの乳母論争では、未婚の母を乳母として雇うことについての是非が議論され、未婚の母が乳母として働くことができれば売春婦になる必要がないという賛成論があった。売春婦の更生に関心を持ち、そのための施設の設立・運営に深く関わっていたディケンズ<sup>3</sup>がこのとき何らかの発言をしても不思議ではないのだが、沈黙を保っている。これはもちろん単に、1852年に第十子が産まれたのを最後に乳母とは縁が切れたため、もはや乳母には関心がなくなっていたことを示しているだけかもしれない。しかし『ドンビー父子』で乳母を美化することを試みたものの、それによって必ずしも乳母使用者としての良心の呵責を払拭できなかったディケンズが、それ以降乳母問題に口をさしはさむことを控えた、とみることもできるのではないだろうか。いずれにせよ、『ドンビー父子』の乳母表象からは、乳母雇用という社会悪に荷担したミドルクラスの一員としてのディケンズのジレンマが読み取れる。

## 注

- 1 『ドンビー父子』の乳母に関する記述が社会史の史料的一面を持つことについては Nakada 参照。
- 2 また、実際に乳母を雇っていたあるミドルクラスの人物の日記には、乳母が自分の家に残してきた子が亡くなったということを開いて感じた罪悪感が記されている (qtd. in Fildes 192-93)。乳母の子は、さらに別の乳母に出されるか、ベビーファームと呼ばれる託児施設に預けられ、十分な栄養も与えられず、適切な世話も受けられなかったため死亡率も高かった。人工哺育の子どもの死亡率の高さについては、たとえば West 532-34参照。
- 3 乳母雇用に関する道徳的批判は、たとえば1850年に Webster 医師が行っている。1859年2月には *Lancet* 誌上で、また1861年1月から2月にかけては *British Medical Journal* 誌上で乳母論争が起こっている。このときは未婚の母を乳母として雇うことの是非が論じられ、双方の利害が合致するという推進派と、子捨て・子殺しを助長するという反対派が毎週誌上で議論を交えていた。
- 4 ディケンズは1848年 *Examiner* で Tooting の託児施設の劣悪な環境について報告し、経営者を糾弾している。また、*Household Words* に1850年に掲載した "Protected Cradles" では、工場労働者の赤ん坊が預けられる託児施設の環境の改善を訴えている。乳母には直接ふれてはいないが、労働者階級の子どもの問題に関心を持っていたことを示すものである。
- 5 たとえば『デイヴィッド・コッパーフィールド』においては、デイヴィッドの母親と



- ミコーバー夫人がそれぞれ授乳している場面が描かれている。また『ドンビー父子』で、スキュートン夫人は臨終の際に、長年いがみ合ってきた娘に対して“'For I nursed you!’” (673) と言うが、これは母乳を与えたことを母親としての義務を果たしたことの証拠として主張し、母娘の確執に決着をつけようとしていると考えられる。
- 6 乳母が梅毒の感染経路になっていることを示す症例については、Acton(1846), Egan, Gavinの論文を参照のこと。実際には、母乳に細菌が含まれているため感染するわけではない。梅毒に罹患した乳母の乳頭にできた傷に含まれる細菌が、乳児の口の粘膜を通じて感染する、あるいは、先天梅毒の子どもの口の粘膜に含まれる細菌が、乳母の乳頭の傷を通じて感染する、ということがありうる。
- 7 たとえば、1840年に初版が出た後、1870年までに10版を重ねたRichard Combeの育児書では、興奮した母親の乳を飲んだ直後、それまできわめて健康だった赤ん坊が突然死んだ、という例があげられ、乳を飲ませる者の精神的安定、性格が子どもの健康を左右する重要な要素であるとしている (113-14)。また、C. H. F. Routhは1859年に未婚の母を乳母にすることの是非をめぐる論争の中で、「女性が授乳するときには、確実に自分自身のいわば血液の精粹を送り込んでいるわけである。したがって、不道徳で肉欲的な乳母が子に乳を与えれば、その子は同様に道徳性を汚される危険にさらされることになる」と述べている。
- 8 ドンビーのこの懸念は後にある程度現実になる。ポリーの長男が、母親がかつて乳母をしていた縁をたよりにドンビー商会に仕事を求めて来るからである (377)。
- 9 ディケンズは『ドンビー父子』執筆時、慈善家アンジェラ・バーデット・クーツに協力して、売春婦の収容施設設立のために尽力していた。これはユーレニア・コテジとして1847年11月開設され、以後10年にわたってディケンズは管理役を務めた。

#### 参考文献

- Acton, William. “Child-Murder and Wet-Nursing.” *British Medical Journal* 16 Feb. 1861: 183-4.
- . “Questions of the Contagion of Secondary Syphilis: Can a Nurse Become Affected with Syphilis from Suckling a Child Labouring under Secondary Symptoms? Instance Bearing on the Question.” *Lancet* 1 Aug. 1846: 127-28.
- . “Unmarried Wet-Nurses.” *Lancet* 12 Feb. 1859: 175-76.
- “Child-Murder: Its Relations to Wet-Nursing.” *British Medical Journal* 19 Jan. 1861: 68.
- Combe, Andrew. *The Management of Infancy, Physiological and Moral Intended Chiefly for the Use of Parents*. 10th ed. Revised and Edited by Sir James Clark. Edinburgh: Maclachlan and Stewart, 1870.
- Davis, J. Hall. “Child-Murder and Wet-Nursing.” *British Medical Journal* 16 Feb.

- 1861: 183.
- Dickens, Charles. *Dombey and Son*. 1848. Ed. Peter Fairclough. Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin, 1985.
- . *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Ed. Kathleen Tillotson et al. Oxford: Clarendon Press, 1977-2002.
- . "The Paradise at Tooting." *Examiner* 20 Jan. 1849.
- . "Protected Cradles." *Household Words* 2(1850): 108-12.
- Egan, John C., "Instance of Disease Contracted from a Nursed Child: With a Few Remarks on the Question — "Is Secondary Syphilis Contagious?" *Lancet* (1846): 214-15.
- Ellis, Sarah Stickney. *The Women of England: Their Social Duties, and Domestic Habits*. London: Charles, [c. 1838].
- Fildes, Valerie A. *Wet Nursing: A History from Antiquity to the Present*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens, 1872-74*. London: Chapman and Hall, n.d.
- Gavin, Hector, "A Report Relative to the Question, Is Secondary Syphilis Contagious?" *Lancet* (1846): 62-63.
- Gladstone, William Ewart. *Gladstone Diaries*. Vol. 3 (1840-1847). Ed. M. R. D. Foot and H. C. G. Matthew. Oxford: Clarendon, 1974.
- Hewitt, Graily. "Wet-Nurses." *British Medical Journal* 2 Feb. 1861: 128-29.
- McKnight, Natalie J. *Suffering Mothers in Mid-Victorian Novels*. London: Macmillan, 1997.
- "Mater." "Wet-Nurses from the Fallen." *Lancet* 19 Feb. 1859: 201.
- Nakada, Motoko. "Wet-Nursing in Dickens's *Dombey and Son*: A Document of Social History." *Studies in Languages and Cultures* 52 (2000): 219-40.
- "New Letters of Mary Hogarth and Her Sister Catherine." *The Dickensian* 63 (1967): 75-80.
- Routh, C. H. F. "Child-Murder and Wet-Nursing." *British Medical Journal* 2 Feb. 1861: 128.
- . "On the Selection of Wet Nurses from among Fallen Women." *Lancet* 11 June 1859: 580-82.
- Terry, H. "Wet-Nursing." *British Medical Journal* 2 Feb. 1861: 129.
- Webster. "Remarks on the Health of London during the Six Months Ending the 30th of Last March." *Lancet* 27 Apr. 1850: 512-14.
- West, Charles. *Lectures on the Diseases of Infancy and Childhood*. 1854. 5th ed. London, 1865.
- "Wet-Nurses from the Fallen." *Lancet* 29 Jan. 1859: 114.